

農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

荒れたふるさとを 美しい里山の「ブルーベリーの郷」に

受賞者 き さ ら づ し かんこう 木更津市観光ブルーベリー園協議会 えんきよう ぎ かい
ちばけんきさらづし
(千葉県木更津市)

■ 地域の沿革と概要

木更津市は千葉県の南西部に位置し、東京湾アクアラインを通じて東京都や神奈川県都市部とつながり、千葉県の玄関口として機能している。市内の沿岸地域は都市部のベッドタウンとして住宅の開発が進み、新住民が増え、大型商業施設が開業するなど発展が著しい。観光面では、東京湾では貴重となった潮干狩りが可能な海岸が多く、春から夏にかけて多くの客が訪れる。

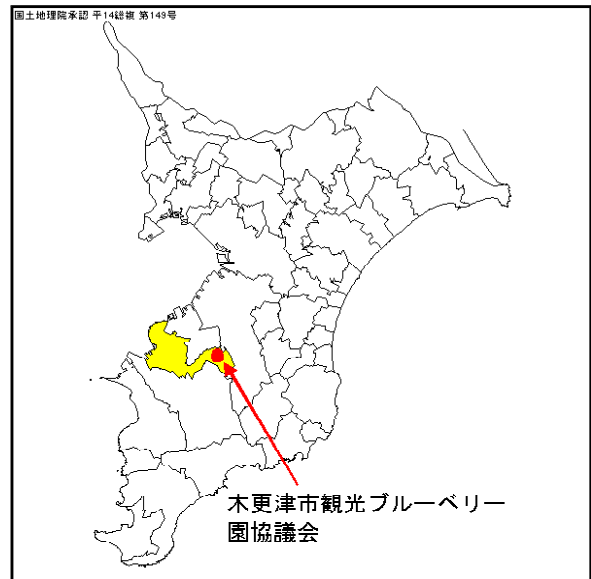
■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

富来田地区は昭和46年に木更津市と合併した旧富来田町で、木更津市の東側内陸部に位置する。地域の中心的な産業は農業で、水稻を中心に果樹、露地野菜が栽培されている。

昭和58年頃から当時の富来田農協の組合長の先導で販売単価が高い果樹栽培が推奨され、梨やキウイフルーツと共にハイブッシュ系ブルーベリーの栽培が始まった。当時、国内にブルーベリー産地は少なく、東京市場では「こんな黒いもの日本では売れない」とまで言われたが、平成に入った頃から「果実に含まれる成分が目の良い」と機能性が注目され需要が増加し、安定した品質と出荷量により市場の高い評価を得てブルーベリーの産地となった。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	旧市町村単位の集団等
地区の性格	機能的な集団等
農 家 率 (内訳)	13.7%
	総世帯数 2,740戸
	総農家数 376戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 55戸
	1種兼業農家 28戸
	2種兼業農家 158戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 4,155ha
	耕地面積 365ha
	田 322ha
	畑 29ha
	耕地率 8.8%
	農家一戸当たり耕地面積 1.0ha

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりを推進するに至った動機、背景

ア むらづくりの動機、背景

ブルーベリーの産地として動き始めた富来田地区では、平成元年頃は120名ほど部会員がいたが、ハイブッシュ系品種は湿害に弱く、水田転換園に導入した園では枯死や生育不良が起き、生産者の高齢化も影響して徐々に人数が減少し、平成8年頃には部会員が50名以下となった。また、住民の高齢化、担い手の減少により耕作放棄地が増えていった。

このような状況の中、農協の営農指導をしていた職員（現協議会会長の江澤氏）が、それまでの肥料や水をこまめにやる管理方法ではなく、樹の持つ力を引き出すためにあえてかん水を控え、肥料も最小限にする管理方法「ど根性栽培」を考え出した。また、ラビットアイ系品種がハイブッシュ系品種よりも樹勢が強く千葉県南部での栽培に向くこと、十分に完熟させることでハイブッシュ系を上回る食味品質となること、収穫期が8月～9月となるため収益性の高い観光農園へ利用できることに気づいた。

当時、東京湾アクアラインの建設が行われており、江澤氏は都心から60分で到着できるという富来田地区の地の利を生かしてブルーベリー観光農園と、耕作放棄地の再生による里山を活用した地域の活性化の可能性を考え始めた。

イ むらづくりの過程とその内容

江澤氏はラビットアイ系品種の導入や「ど根性栽培」を呼びかけたが、部会員たちの反応は鈍かった。そこで自ら栽培を実践すべく平成9年に農協を早期退職し、所有していた山1haを夫婦二人で伐竹、伐採し、自ら栽培に取り組んだ。実がなるまでには4年もかかったが、その間も間伐材による山道の整備などを続け、地域の特色である自然豊かな環境を都市部住民に提供する「自然の中のブルーベリー摘み取り園」を平成14年に開園した。

一方、富来田地区の耕作放棄地が増える中、平成15年頃から非農家を含めた住民の中に「地区の環境を守るために、何かしなければならぬ」という危機感が芽生え始めた。

地区の土木業者は、江澤氏の見聞を見てブルーベリー栽培の相談を持ちかけ、丁寧な技術指導を受けながら耕作放棄された



写真1 耕作放棄地が親子で楽しめる観光農園に

水田に客土を行い、数年かけて1haという規模で栽培を始めた。また、障害者福祉作業所（NPO法人）の代表である女性も、廃園し荒廃していた梨畑を地域住民から借りて整備し、ブルーベリー栽培を開始した。その後も、富来田地区を含む木更津市全域で、江澤氏の指導を受けて観光摘み取り園が次々と開園した。その様子を見ていた周辺農家の中には、遊休農地化させるくらいならと、自分の農地を観光摘み取り園に貸し出すことを希望する人も出てきた。

平成19年、江澤氏が中心となり木更津市内の5園と関係機関で「木更津市観光ブルーベリー園協議会」（以下「協議会」という。）が設立された。協議会では、会員が協力することで各園の経営を発展させ、かつ活動の中で富来田地区の里山再生による地域活性化に取り組むことへの合意形成がなされた。

ウ 現在に至るまでの経過

その後、江澤氏の指導を受けて市内に開園した5園が新たに参加し、協議会参加園は10園となった。協議会参加園と市や商工会議所などが連携して市内外で積極的な宣伝活動を行うことにより、平成22年には年間4,800人だった来園者が、平成27年には12,000人に増加し、来園者アンケートでは「また来たい」「自然環境も魅力的」と評価が高い。旅行会社と契約し、観光バスが訪れる園もあり、ブルーベリー園は、木更津市の大きな観光資源となっている。

協議会では地域整備として、馬来田駅のホームにブルーベリーを植栽したり、地域内の主要道に「ブルーベリー街道」の案内看板も設置している。また、耕作放棄地の再生や川沿いの清掃、古民家の休憩所への改築、桜の苗木定植など、里山の整備も行っている。伐採した竹はチップ化してブルーベリーの株元に敷くなど資源の有効活用も図っている。

このような活動により、富来田地区ではブルーベリー園の存在を中心に、耕作放棄地の解消と都会からひとが訪れる里山の環境作りが現在も進行中である。



写真2 再生した里山風景と休憩所

さらには、JR久留里線活性化プロジェクトへの参加や、ブルーベリーの紅葉観賞と、葉や果実を使った染色体験イベントを主催するなど、協議会の活動は年間を通して富来田地区に「ひとを呼ぶ」取組へと発展している。

(2) むらづくりの推進体制

ア 組織体制、構成員の状況

協議会はブルーベリー園を開園している正会員10名、開園準備中の准会員3名で構成され、会長、副会長、事務局長、監事が役員である。また、理事として千葉県君津農業事務所、木更津市農林水産課、木更津市観光協会、JA木更津市等が参加しており、各機関から情報提供やアドバイスが行われるなど、宣伝、協議会運営への協力体制が整っている。

平成27年には協議会と木更津市、千葉県君津農業事務所等が地域課題を協働の取組で解決する組織に与えられる「ちばコラボ大賞 千葉県知事賞」を受賞した。

第2図 組織図



イ 連携してむらづくりを行う他の組織、団体等との関係

協議会では、地域住民にブルーベリーへの愛着を持ってもらいたいと考え、富来田公民館、JR馬来田駅ホーム、馬来田小学校の校庭へブルーベリーを植栽し、中学生の職業体験の場として園を提供するなど、地区の特産物に理解を深める取組も行っている。他にも協議会会員ごとに、ロータリークラブや起業家のネットワーク組織、富来田地区の直売所、ゴルフ場等の団体と連携しており、園ごとのイベント、加工品の開発、宣伝・販売活動を行う際の大きな助けになっている。



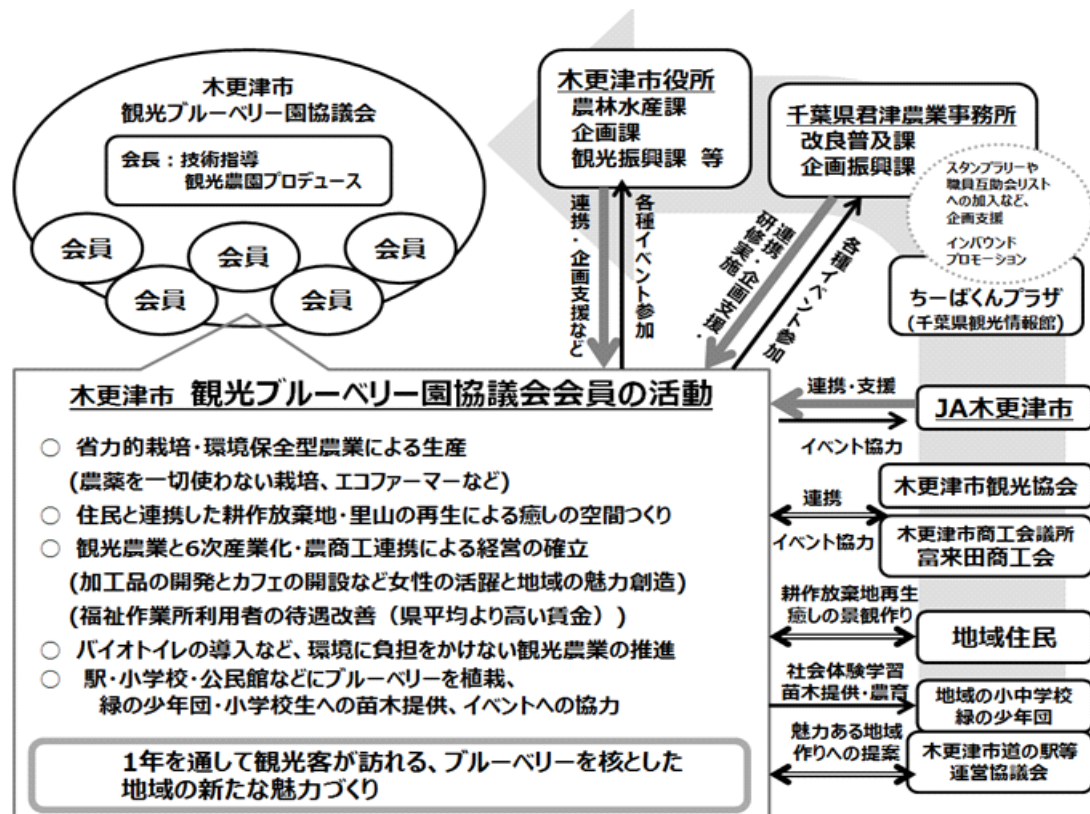
写真3 JRとの連携による宣伝ポスター

市内沿岸部の大型商業施設内の「チーバくんプラザ 千葉県観光情報館」と連携したスタンプラリーの実施や、コスモスフェスティバル実行委員会などの地域内の他の組織とイベント時の加工品販売の出店などで連携もしている。

また、富来田地区に平成29年に開業が予定されている道の駅については、「木更津市道の駅等運営協議会」に協議会からも委員を送り出して、他の組織の委員と協力して、ブルーベリーを活用しつつ、1年を通して

観光客が訪れるような地域の新たな魅力づくりを提案している。

第3図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

協議会の活動は、観光という新たな経営視点を取り入れつつ、富来田地区の駅、小学校などへのブルーベリーの植栽や、里山整備等によって、「ブルーベリーの郷」富来田地区として、新たなむらづくりの取組が実現している。

2. 農業生産面における特徴

(1) 生産、流通面での取組状況

協議会員は各園とも15品種程度を組み合わせることで栽培することから、7月中旬から9月中旬まで収穫可能であり、収穫期が夏休み期間中となるため多くの客が訪れる。樹勢の強い晩生品種を組み合わせることで栽培しているため、来園者に「いつ来ても果実がある」環境を提供している。また、協議会では来園者の希望に応じて、車椅子で入園できる園やバスが入れる園を紹介している。

栽培面積は全体で8.5ha、生産量は約30t。摘み取り園経営の他に果実を各園で多様な製品に加工し、郵便局の「ふるさと小包」による宅配贈答用や、園によっては量販店向けや菓子店等に出荷している。

(2) 生産力の向上、生産の組織化、生産・流通基盤の整備

協議会では栽培方法を統一しており、全ての園で農薬を使わず、有機質肥料主体の栽培を行いエコファーマーの認定を受けている。これは摘み取りの来園者に安心して食べてもらうための申し合わせである。さらに、生育状況確認のための巡回、剪定巡回等も行っている。

また、加工の取組では、園で作ったジャムや焼き菓子と、委託加工によるゼリー、ジュース、リキュール等を各園や近隣の直売所で販売している。会員のゼリー、果実濃縮飲料、ジュース、生鮮果実は、木更津市の「ふるさと納税」のお返しの品にも選ばれ、喫茶室のある園では、パフェや作りたてのジュースも提供している。園の経営主には女性も多く、君津地域の起業家で作るネットワークに参加し技術の研鑽を行っている。



写真4 会員各園の加工品

(3) 構成員等の経営の改善、後継者の育成・確保、女性の経営参画の促進

共同チラシの作成や東京湾アクアラインの海ほたるパーキングエリアでの宣伝等の活動を行うことによって、1つの園では出来ないことが可能となっている。こういった活動の成果により、来園者数は増加し各会員の園での雇用拡大などに繋がり、NPO法人の福祉作業所では、県の平均よりも高い水準で賃金を支払うことが可能となった。また、他市に就職した20代の後継者がUターン就農し、会社の農業部門の経営担当として加工品の開発や販売先の開拓、農商工連携などに積極的に取り組んでいる園もある。

協議会の10園中3園で女性園主が活躍し、男性が園主を務める園でも接客、加工部門で妻が活躍している園が多い。女性の視点で子供向けの水遊び場を設け、若い女性向けに居心地のよい飲食場所の設置をして好評を得ている。また、ブルーベリーを生かしたメニューの喫茶店を開店し、濃厚なジュースを目玉商品として経営している女性会員もいる。他にも福祉作業所を運営している女性は6次産業化に取り組み販路拡大を図る等、女性が活躍しているのは接客が主となる観光摘み取り園ならではと言える。



写真5 親子連れで楽しめる観光農園

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 生活・環境整備面の取組状況

耕作放棄地の解消、竹林等の開墾等による環境整備を行っているが、地域内の川岸を整備して景観植物を植えたり、山の斜面に芝桜やクリスマスローズ、桜を植えたりと、ブルーベリーだけでなく、他の季節にも観光客が訪れる里山作りを行っている。富来田地区では自然環境の豊かさを特徴としたハイキングコースが設置されていて、会員が取り組む環境美化が地域全体の観光客誘致に繋がっている。間伐材チップを利用したバイオトイレの導入にも取り組んでおり、来園者だけでなく、地域のハイキング客にも開放されている。



写真6 草刈りによる環境整備

富来田地区の主要道路に面した各園でこのような取組が継続して行われているため、耕作放棄地のままであった頃とは、景観や雰囲気も大きな違いがある。耕作放棄地は、有害鳥獣の営巣やゴミの不法投棄を誘発するが、協議会の行う地域整備はこれらを防止するのに大きく貢献している。

(2) 生活条件の改善・整備、コミュニティ活動の強化、都市住民との交流

市内、県内、東京からの都市住民が多数訪れ、規模の大きい園ではバス会社を通して都内やタイなど海外からの観光バス客も受け入れている。協議会では、都市住民の憩いの場としてブルーベリー園作りを行っており、山野草を楽しみながら里山を散策できるような園、遊具や水遊び場を設置するなど親子連れが過ごしやすい園、広い芝生で飼い犬も入園可能な園等、園ごとの個性を生かした設備を充実させている。協議会の園を何カ所も訪れる客もあり、個性を生かした園作りが協議会参加園全体の活性化に繋がっている。



写真7 園内でピザ作り

また、園内でのイベントも充実させており、開園期間中に竹を使った流しそうめんやアマチュアの演奏会、ピエロの大道芸といった果実を摘み取る以外の楽しみを提供

している。一方、来園者は地域の直売所にも訪れるため、地域の農産物や加工品が都市住民に知られるチャンスも増え、開園時期以外のシーズンに富来田地区を訪れるリピーターも生まれている。

(3) 地域への定住促進、女性の社会参画の促進状況等

定年退職後に東京都から富来田地区へ移住し、会員の園の仕事を手伝い協議会に入会した男性は、看板作りから古民家の改築まで幅広く地域で活躍している。また、女性園主が農育活動として小学校の野外活動を受け入れたり、君津農業事務所主催の起業家育成セミナーで起業経営や加工について学び新たに喫茶部門を立ち上げたり、道の駅等運営協議会委員として参加して地域活性化対策案を検討する等、女性の活動も積極的に行われている。さらに、木更津市商工会議所、富来田商工会女性部等に所属し、研修会参加、イベントでの出店等、地区外でも活躍している。